

第13号

札幌くらぶ

発行／札幌くらぶ
 (財)札幌交響楽団内
 札幌市中央区中島公園1番15号
 (札幌コンサートホール内)
 電話 011-520-1771
 F A X 011-520-1772

平成12年度総会開催される

予算、事業計画、役員を承認



去る6月10日(土)、午後5時から札幌コンサートホール2階大会議室で、平成12年度の札幌くらぶ総会が約80名の会員の出席を得て開催されました。

総会は、例年通り会長挨拶に続き、前年度の事業報告と決算報告及び監査報告が行なわれ、事務局提案通りに承認されました。また、1,202,927円の新年度予算案、同じく事業計画案も提案通り承認されました。

事業計画には、会報の発行、交流会のあり方の検討、練習見学会の開催のほか、「第3回札幌くらぶコンサート」開催の準備(来年5月26日を予定)、そして、2001年10月下旬から11月上旬にかけて行なわれる予定の札幌の英国巡演を聴くツアーの企画の検討が盛り込まれました。まだ英国巡演は正式決定にまでは至っていないとのことですが、前号で尾高さん



も呼びかけておられました。

また、本年度は役員改選の年でもあり、会則によって、会長並びに監査の互選が行なわれた結果、会長には山科俊郎現会長、監査には石川政治、八谷貢現両監査が再選されました。その他の会長指名役員についても、退任の意向の事務局次長以外は現役員に続けてほしいという会長の発言がありました。

最後に、「札幌くらぶコンサート」の上田文雄実行委員長から、第1回、第2回コンサートの剰余金の処分について、昨年度の総会で報告し承認されていた通り、第3回コンサート実施のための準備金を除く1,445,717円を札幌交響楽団に寄付したい旨報告があり、委員長から札幌の白鳥専務理事に目録が贈呈されました。(左の写真)

総会は予定通り約1時間で終了しました。



ソリストにきく

札幌首席コンサートマスター

グレブ・ニキティンさん

生活の基盤は音楽
楽しいコンサートを!!



グレブ・ニキティンさんのプロフィール

1964年モスクワ生まれ。6歳からピアノを、8歳からヴァイオリンを学び始め、84年モスクワ音学院に入学。バレリー・クリモフ氏に師事して、89年同音学院ヴァイオリン科卒業。また、レオニード・ニコラエフ氏に師事して、92年同音学院指揮科卒業。

88年ズビン・メータ、ドミトリー・キタエンコ両氏の指揮による米ソ合同オーケストラにてコンサートマスターを務める。同年、イタリア・ナポリのクルチ・コンクールに出場して栄誉ディプロマを受賞。90年には同じくイタリア・ゴリチアの国際ヴァイオリン・コンクールで第3位と栄誉賞を受賞。

これまでモスクワ・ボリショイ劇場管弦楽団の副コンサートマスター、旧ユーゴスラビア・クロアチアのザグレブ・フィルのコンサートマスターを経て、93年10月から札幌コンサートマスターに就任。98年10月からは首席コンサートマスターに就任して現在に至る。

「札幌くらぶ」11号にご登場の奥様、国際的ピアニストの三船優子さんと1歳3か月の愛娘クリスティーナちゃんの三人家族。

6月12日「北電ファミリーコンサート」の練習日に、芸術の森でニキティンさんにお話をうかがいました。お名前は「GN」とさせていただきます。

— 今年2月の定期演奏会で、グラズノフのコンチェルトを演奏されましたが、札幌との協演は何回目ですか。

GN 以前、メンデルスゾーン、チャイコフスキーのコンチェルトや「四季」で協演していますが、定期演奏会は今回が初めてです。

— ソリストとしての札幌との協演はいかがですか。

GN コン서트マスターは常にソロを義務づけられているようなものですから、ソロ自体に抵抗はありませんが、やはり、自分のオーケストラは緊張しますし、やりにくいですね。オケのメンバーも聴衆の皆さんも私のことをよくご存知ですから、失敗できないという気持ちがついつい強くなりがちです。

— ヴァイオリンを始められたきっかけは何でしたか。

GN 私の両親は二人ともピアニストで、私も6歳からピアノを学びました。しかし、どうしてもピアノは性に合いませんでした。そんな私を見て、母が「ヴァイオリンを習ってみたら」と勧めてくれたのがきっかけでした。性に合っていたのか弾くのが楽しくて、8歳から本格的に習い始めました。

— 順調にヴァイオリニストとしての道を歩まれたのですか。

GN やはり、様々な迷いはありました。父は早くに亡くなり、私は一人っ子で母に育てられましたが、母は将来の職業について、決して強制はしませんでした。音楽はもちろん好きでしたが、青年期には様々なことに興味があり、17歳の時には天文学者になろうと思い、全く音楽をやめて天文学を学びました。しかし、やはり音楽を捨てることはできず、1年後、音楽に戻りました。

— プロになろうと思ったのはその頃ですか。

GN そうです、18歳の頃だと思います。

— 昨日「札幌シンフォニエッタ」の演奏会で指揮をされましたが、ヴァイオリンと指揮のどちらに魅力をお感じですか。

GN 私はモスクワ音学院をヴァイオリン科で卒業してから更に指揮科で3年学び、2回卒業しています。演奏も指揮も音楽をやることには変りはなく、どちらも楽しいと思います。もともと、コンサートマスターの仕事という

ものは、その70%は指揮者としての仕事のようなものなのです。どんな曲を演奏する時にも、ただパート譜を練習するだけではなく、必ずスコア（総譜）を勉強します。それだけでなくはコンサートマスターの職責は果たせません。ですから私がコンサートマスターとして演奏している時は、70%は指揮者としての仕事、30%は演奏者として仕事をしていることとなります。

— 今までの演奏活動で、特に思い出に残っている演奏というのがありますか。

GN ソロとしては1992年ザグレブ・フィルとのチャイコフスキーの協奏曲、そして、今年2月の札幌との協演ですね。オーケストラの一員としては、プロとしてではありませんが、1988年にワシントンのケネディーセンターで当時のソ連とアメリカの学生の合同オーケストラの演奏会でコンサートマスターを務め、ズビン・メータの指揮で演奏したことが思い出に残っています。

— 日本に来た時の印象はいかがでしたか。

GN 初めて日本に来たのは、ザグレブ・フィルの日本公演の時で、その時には、日本という国はすべてにシスティマティックで、管理社会的な印象をうけました。でもそれは、日本人のきちんとした生活態度がそう見えたのだと思います。

— 食べ物の違いなど、日本での生活で困ったことはありませんでしたか。

GN ほとんどありません。食べ物もとてもおいしく、漬物や納豆なんかも好きです。でも、海苔だけはいまだにちょっと苦手です。

— 札幌に来る決意をされたのは大変だったと思いますか。

GN 札幌に来ないかというお話があった時点ではもちろん決断はできませんでした。ザグレブの日本公演を終えて一度ヨーロッパに戻ってから、とりあえずゲストプレイヤーとして初めて札幌に来ました。その時の札幌の印象は強烈でした。街全体が、まるでおもちゃでできた街のように、私には美しく愛らしい街に感じられました。そしてその清潔さにも驚かされました。また、その時泊まったのが、天神山のゲストハウスでしたが、その素晴らしさと、そこに私を含めて二人しか宿泊していないという贅沢さに驚嘆しました。そして何よりも、一緒に演奏した札幌の楽員の親切さ、温かさに心打たれました。その年には札幌に行く決断をしました。



— 日本で結婚もなさいましたが、ご家族との時間を作るのは大変ではありませんか。

GN 確かに大変ですが、なるべく家族一緒の時間を確保するように努力しています。でも、仕事の都合でしばらく娘に会えないと顔を忘れられていることがあり、それがつらいですね。

— 札幌の現状と将来についてお考えになっていることをお聞かせください。

GN いろいろありますが、今現在私が心配していることは、札幌以外の地方公演や小中高を対象とした音楽教室が減っていることです。札幌が広く道民の皆様に愛され、将来の札幌を支えてくれる層を確保するという点からしても深刻な問題だと思えます。社会情勢などやむを得ない面もあるとは思いますが、オーケストラがより一層の努力をしなければならぬと思います。

— 何か具体的な解決法はあるでしょうか。

GN 簡単ではありませんが、一つの着眼点としては、コンサート自体をもっと楽しく面白いものにする努力があってもいいのではないかと思います。例えば、4月に行なった「札幌くらぶコンサート」では、聴衆の皆さんも楽員もとても楽しい体験をしました。単に「指揮者にチャレンジ」のコーナーがあったからというのではないと思います。一つ一つのコンサートの企画を、よりお客様に楽しんでいただけるよう努力することだと思います。

— 最後に、今後の音楽人生で何か目標とされていることはありますか。

GN いろいろありますが、一つだけ申し上げます。札幌を指揮することです。

— なるほど、実現するといいですね。長時間ありがとうございました。今後の益々のご活躍をお祈りいたします。

(インタビューア 田山登代美 佐藤紀子
佐藤良次)

札幌響40年の歩み—事務局と練習場の変遷—

札幌交響楽団ステージ・マネージャー 海藤 正吾

札幌響の草創期から札幌響と共に歩み、その成長を陰で支え続けたステージ・マネージャーの海藤さんに、来年創立40周年を迎えるのを機に、その思い出をつづっていただきました。

札幌響は来年創立40周年の節目の年を迎える。世代交代の波も押し寄せて来ている。私もその一員として、入団足掛け38年目を迎えた。

ここでは、そのあまり知られていない事務局と練習場の變遷を、少しばかり皆様へ、駆け足で紹介させていただきたい。

私の入団した昭和38年当時の事務局は、札幌市民会館の3階で、市の教育委員会のフロアの一部をロッカーで仕切った、6畳程のうなぎの寝床のような細長い狭いスペースで間借りしていた。局員は私を含め5名。

練習場は、中島公園入口の中島児童会館であった。モルタル塗り、だるまストーブひとつという環境だった。40~50人程の編成でいっぱいになる所で、第1ヴァイオリンの横と壁までは50cm程しかない、そんなスペースである。まだ完全プロ化はされていなかったが、不平も出ず、オーケストラ誕生にアマ・プロを問わず、情熱が感じられた、そんな時代であった。

創立時から5年間の演奏回数を会計年度別で見ると、昭和36年9月から37年3月まで17回。38年度56回。39年度48回。40年度51回だった。現在の100回を超える回数から比べると、練習日数は多かったものの、随分とゆとりが感じられる。

このような回数からか、現場の仕事分担はまだ専門的に確立されておらず、楽譜係は楽員の一人が兼務し、ステージはアマチュア・オーケストラのごとく、早く着いた人がセクションごとに、取りあえずセットしておくという状態だった。私の仕事はというと、宣材（プログラム、チラシ等）の編集、時には帳簿の整理や銀行回り、定期会員増員のための勧誘の外回り等々、そして練習場との使い走りの往復である。

昭和43年練習場は南1西3大丸藤井ビルの4階へと移ることになる。ここはHBCラジオ局だった所で、現在の北1西6に本社ビルが完成し、移転したためである。ラジオ・スタジオが防音設備になっていることもあって、少しの改良工事で済むということで、HBCさ



んの紹介と大丸藤井さんのご厚意で実現した。

一部屋のスペースではあったが、立派な専用練習場の誕生である。調整室だったガラス窓の部屋は楽譜室となった。当時の楽員は自家用車族はまだ少なく、演奏会場の市民会館とは近く、特に金管セクションは、コンディションを調整して行ける距離で重宝がられた。ただ、南1条通りは駐車禁止の場所で、トラックへの楽器搬入には苦勞した。またビル内のエレベーターは旧式で小さく、大きなティンパニーは階段を使用するはめになる。当時のアルバイト諸君には感謝、感謝である。また、エレベーターの使用で、テナントの方々と、「ラーメンの三平」さんへ行かれるお客様には随分と迷惑をおかけした。

さて、事務局は市の第2庁舎（現、本庁舎の駐車場の場所、旧産業会館の一部）に移ることになる。ビルの南側2階の片隅、まるで隔離病棟的な部屋。1階には職員食堂があり、その匂いと湿気にはほとんどまいった。しかし、提供されていて贅沢は言えない。財政難の折でコピー機もなく、楽譜はもっぱら市役所の機器を利用させていただいた。

昭和49年大丸藤井ビル改築工事にともない、新たな練習場探しとなる。たまたま、冬季オリンピックのプレスセンターとして使用していた、真駒内の北海道青少年会館の情報を得た。ホールは自主公演、学生の夏の合宿以外はあまり使用されていないこともあり、使用交渉はスムーズに運んだ。楽器置き場と楽譜室の確保には、何かと制約のあった場所の問題を、会館の事務当局者の方々に快く受け入れていただいた。



セッティング中の海藤さん

ホールは500席程で、程よい空間があり、ステージは奥行きと間口に多少の狭さはあるものの当時としては立派なものだ。ただ、楽器搬入時の門限が午後10時ということと、会館の裏手は急な勾配の坂道で、冬は楽器運搬のトラック運転手さんたちの泣かせの場所だった。また、ホールには冷房がなく、夏の練習はドアを開けての自然冷房、冬季の暖房は乾燥がひどく、ステージに水を撒いての練習もしばしばあった。（いや、これはオフレコだったかも!）結果的には62年6月までお世話になった。（以下、次号に続く）

札幌物語 XIII

道内公演 3

～一度だけの雪害キャンセル～



帯広は札幌にとって馴染みの土地です。創立の翌年、昭和37年9月、今は既に建物が無くなった厚生年金市民会館の落成記念コンサートに出かけたのが札幌にとっては初めての泊まりがけの演奏旅行でした。

ホールが完成した昭和36年の秋、北海道は未曾有の大雨に見舞われました。国鉄根室本線も狩勝峠の路床がすっかり洗い流され、復旧に3か月もかかったほどでした。

帯広の落成記念コンサートが目的で来道したNHK交響楽団は国鉄が不通、札幌周辺の国道も冠水で身動きならず、札幌公演の後旅館で3日間待機した後復旧した函館本線で東京に引き返してしまいました。

翌年、札幌がN響に替わって初めてのオーケストラ公演を行ったのです。

修学旅行のように全員が帯広中央公園のすぐそばの旅館に泊まり、深夜までそれぞれの部屋でしゃべり合っていました。午前2時過ぎ、2階の部屋の窓に小石が当たり、何事かと見下ろすと、締め出された楽団員3人が窓を見上げていました。宿の人を起こすのも悪くて、3人の酔っ払いは煙突を支える梯子を伝って窓から帰還しました。

真新しいホールで満員の聴衆を前に初代常任

指揮者荒谷正雄指揮でベートーベンの交響曲第3番「英雄」ほかを演奏しました。

帯広ではその後ペーター・シュバルツ、岩城宏之、尾高忠明など歴代の指揮者で度々演奏しました。

昭和55年3月10日、前日からの低気圧の通過に伴い北海道では北から冷たい風が吹き込み、普段雪の少ない太平洋側にまで大雪を降らせました。千歳から来る午前9時札幌発釧路行き特急「おおぞら」は実に4時間遅れて札幌駅に到着し、待っていた楽団員はともかくそれに乗り込みました。

超満員で立ちっぱなしの列車に6時間揺られ午後7時に帯広へ着きました。普段は雪のない帯広が一面の雪景色、雪の中には人が歩いた獣道のような細い深い道が1本だけありました。楽団員はくたびれはてた足を引き摺り、転ばないように気を付けながら足跡を頼りにホテルに向かったのです。

もし、オーケストラが予定通り到着していても、聴衆は集まれなかったのです。午後6時30分開演予定の演奏会は勿論キャンセルになりました。札幌の4000回以上の演奏会でたった一度の雪害によるキャンセル公演だったのです。

(竹津宜男)

オーケストラなんでもQ&A

Q. 札幌に限らず一般的に、コンサートのプログラムは誰によって、どのように決められるものなのですか。

A. プログラムの決め方には、大きく分けて2通りあります。1つはオーケストラが研究のためとか、記念事業などのために、特別なプログラムを組む場合です。もう1つは、予定する指揮者の希望するプログラムをもとに検討する場合です。

オーケストラ内で、それらをどのような手続きで決めるかは、世界中のオーケストラの伝統や慣習、運営母体の取り決めなどにより千差万別といっていでしょう。

Q. よく「キタラはよく響く」とか「キタラの音はいい」と聞きますが、ホールの善し悪しは何が基準になるのですか。

A. 簡単に言ってしまうと「よい残響がまんべんなく、ほどほどに行き届くこと」です。ということは「よい残響」が最も大切な基準です。

キタラの成功は「ステージで演奏者が出す音を心地よく響かせるホール」を考えて設計が始まったことです。有名な建築家が建物のデザインを決めて、その後でホール内部の音響を考える例が多い中で、キタラは初めて、音響を中心にして、それからホールの形が決まった、世界でも珍しい成功例なのです。

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 首席チューバ奏者

かがわ ちたて
香川 千楯 さん

チューバを始めたきっかけは何ですか

中学1年の時に、通っていた中学に吹奏楽部ができました。元々音楽が好きだったので入部しましたが、ちょうどチューバが学校に届いたところで、先生は、私ともう一人の生徒を考えていたらしいのですが、たまたまもう一人の生徒が欠席していて、私が指名されたのが出会いです。

そのころからプロになろうと思っていたのですか

いえ、中・高と同期でクラリネットをやっていた人が、当時、北海道からはほとんど合格できなかった東京芸大に合格しまして、それが刺激になったのだと思います。私は家庭の事情で東京に出て働きながらチューバを勉強していましたが、習っていた先生の勧めで芸大をうけたら合格することができ、結局チューバを続けることになりました。

札幌に入団したいきさつを教えてください

当時、札幌にはチューバ奏者がいませんでしたので、学生時代からエキストラとして来ていました。大学4年の時に、北海道出身ということもあって、当時の事務局長さんからオーディションをうけるよう勧められました。

これまでの演奏活動で思い出に残ることはありますか

恥ずかしい話ですが、若い頃何回か時間に遅れてしまったことがあります。釧路で岩城さんの指揮で「悲愴」をやった時、友人の車に便乗させてもらったのですが、道路工事の迂回路で渋滞し、着いた時にはゲネプロが始まっていました。そっと入り、チューバが最初に音を出す部分の約3秒前に着席し、何とか演奏に間に合いました。冷や汗をかきましたが、岩城さんは多分気づかなかったと思います。

人生のモットーのようなものはありますか

私はずっと「年をとっても目は生き生きとした人



間でいたい」と思ってきました。特に人前に入る仕事ですから、悩みや苦しみを抱えていても、せめて表情だけは、明るく生き生きとしていたいと思います。そのためにも、今よりもっと上手くなるよう向上心を保ち続けたいと思います。

これからの札幌への思いをお聞かせください

札幌も40年を迎え、最近は本当に若くて優秀な楽員が入ってくるようになりました。そういう人たちのためにも「5年後、10年後の札幌はこういう規模で、こういう指揮者で、こういうオーケストラに」という具体的なビジョンが示されるといいですね。そうすれば、楽員達にも一層の張り合いが生まれると思います。

札幌くらの活動をどうお思いですか

我々にとって、とてもありがたい組織だと思います。コンサートも、温かい雰囲気でも成功していると思います。更に、私達が一方的に応援していただくだけではなく、我々楽員の側も、札幌くらのために、一緒になって何ができるのかを考えていきたいと思っています。

札幌交響楽団 チェロ奏者

かわさき まさこ
川崎 昌子 さん

チェロを始めたきっかけは何ですか

小学校に入った頃から、ヴァイオリンを習いに

行っていましたが、たまたま小学校に合奏クラブがあって、4年生の時に先生に勧められました。ヴァイオリンが弾けるんだからチェロも大丈夫だろうと言われて弾いてみたのが最初です。それからは、ヴァイオリンをだんだん弾かなくなって、すっかりチェロの方がよくなってしまいました。



札幌に入団されたいきさつをお聞かせください

大学を卒業して、将来の生き方をいろいろ考えました。できれば、好きなチェロを弾きながら、生活してみたい。更に、私はアンサンブルが好きでしたから、オーケストラに入りたいと思いました。

そんな時、友人に札幌に空きがあるので受けてみたら、と勧められました。オーディションを受けるためにエキストラに呼んで頂いたのですが、それまで、札幌のエキストラを含めて、2、3回しか訪れたことのない北海道は、私にはほとんど未知の世界でした。そんな場所で一人で独立して生活してみたかったのです。

北海道での生活は大変ではありませんでしたか

言葉、生活習慣、その他すべてが新鮮な驚きの連

続で、楽しかったですよ。雪の日に傘をさして笑われたり、先輩楽員に「じょっぴんかってきたか」と言われて「どこで買うんですか」「たばこ屋で売ってるべ」なんてからかわれたり、とにかく楽しかったですよ。雪もスキーをやっていたので特に驚くこともありませんでした。

札幌で心に残っている思い出はありますか

エキストラで来た時、温かい雰囲気の中で、岩城さんや尾高さんの指揮で演奏したことを今でもはっきり覚えています。あと、入団してから、アルベルト・エレーデというイタリア人の指揮者で「新世界」をやったのですが、まるで室内楽の練習のように、具体的で詳しい説明で、しっかりと曲のイメージを与えられ、何度も弾いてきた曲がとても新鮮に感じられました。

何か趣味をお持ちですか

山歩きとかキャンプとか、自然の中にいるのが好きですね。家では、お酒と料理ですね。料理は和食系が多いのですが、ただレシピの通り作るのではなく、ちょっと自分なりの工夫を入れるのが楽しいですね。

将来への夢のようなものはありますか

自然に囲まれて、自給自足のような生活をしてみたいですね。ガーデニングなんかも好きで、私の家はマンションなのですが、毎年ベランダで何種類かの野菜を作っているのですよ。

札幌くらぶをどうお思いですか

私達をサポートして下さる方々が、目に見える団体として存在して下さるのはありがたいことだと思います。会員の方々の中には、古くからの札幌ファンもいらっしゃると思います。最近ファンになられた方もいらっしゃると思います。どなたも、自由に自分の思いを話せるような雰囲気を作っていただきたいと思います。

(インタビューー 佐藤良次)

from 「札幌くらぶ」

総会も無事終了し、会員の皆様のもとには本年度の会費納入の連絡が届いていることと思います。同封の振替用紙で、または、定期演奏会の会場での納入を、お忘れなくお願いいたしま

す。

新たに「札幌くらぶ」入会をご希望の方は、随時受付をいたしております。札幌事務局、定期演奏会の札幌くらぶカウンターへどうぞ。

FAN NETWORK

指揮者の尾高忠明さんと札幌のみなさんへ

みなさんこんにちは。私は、この前の第2回札幌くらぶコンサートで、指揮者にチャレンジのコーナーで指揮をさせていただいた、小学校5年生の女の子です。思い出していただけたでしょうか。あの時は、とても楽しかったです。ありがとうございました。

指揮をさせていただいた後で、ピオラのお兄さんは、私の体がそっていたので、たぶん、えらそうに思われて「しょう来は大指揮者ですね。」と言われたと思います。でも本当はみなさんの音が、私を押し込んでいるように感じられて、体がうしろにそってしまったのです。

最初は、きんちょうしていて、ふ面台しか見ていられませんでした。やっとのことで、上を向いて札幌のみなさんを見ました。すると、バイオリンのお姉さんと、チェロのお兄さんが笑っているのが見えました。

あと、私は学校の金管バンドでトランペットをふいていますが、きんちょうしていて、ざん念ながらトランペット奏者のかたを見つけることはできませんでした。それから、指揮者の尾高忠明さんは、とてもやさしくしてくださって、ものすごくうれしかったです。いただいた指揮ぼうは、宝物にして大切にします。ありがとうございました。

その後、地下鉄で帰るとちゅう、バイオリンのお姉さんに会いました。お姉さんは、「今日、楽しかったわよ。」と声をかけてくれました。たぶん、指揮者の尾高さんからいただいた指揮ぼうを私が持っていたからだだと思います。うれしかったです。

今度、5月5日の子どもの日のコンサートに行きます。札幌のみなさんにお会いできるのを楽しみにしています。

尾高忠明さん札幌のみなさん、楽しい思い出を、ありがとうございました。

(札幌市立北郷小学校5年 中田星子)

第2回札幌くらぶコンサートのアンケートより

若い時のイメージで来たので、尾高さん変わったね～。円熟味が増して、曲想に迫力がありました。札幌は、毎年何回も聴いています。絶対に内地の楽団に負けないように、一流を保ち続けてください。

(40代 男性)

招待?の学生服の一団の身を乗り出す様にしている姿勢に感心しました。次代を担う人たちにもっと良い席を提供してあげたらと思いました。

(60代 女性)

「ボレロ」はテレビなどでよく聴くのですが、生演奏で聴くとこんなに迫力があるとは思いませんでした。すっかり感激してしまいました。指揮者のトークもとてもユニークで楽しく聞かせていただきました。なにか楽屋口をのぞいた気がしました。

(70代 男性)

今日のコンサートでは、知っている曲が多かったので、とてもしたしみやすく、楽しかったです。

「フィンランディア」はとても好きな曲なので、うれしかったです。2曲目の曲も、聴いたのは初めてだったので、とても日本風でききやすく、きれいな川のせせらぎのようなメロディーが気に入りました。

(10代 女性)

ゴソゴソおしゃべりのおばさんが右側にいて落ち着かなかった。いつもおしゃべりしているので、注意のアナウンスも聞いていない。中年のおばさんは離れた席にすることはできないものかしら、などについて考えてしまった。悲しい、恥ずかしい。

(60代 女性)

編集後記

1ページで報告しました通り、本年度総会も終わりました。現会員数は418名と報告がありました。微増という所でしょうか。更に会員数が増えることを願ってやみません。

「FAN NETWORK」では、前号に掲載できなかった中田星子さんのお手紙と、アンケート

の声を掲載しました。アンケートの声はまだまだたくさんあるのですが、一応今回で終わりとさせていただきます。せっかくお書きいただきながら、掲載できなかった方々には申し訳ありませんがご容赦ください。皆様の新たなご投稿をお待ちいたしております。(佐藤良次)